

芥川だより

発行日 * 2022年12月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

自戒は難しい



先日、田舎の同級生を誘って一杯をやった。毎日、晩酌で糖質・プリン体ゼロの焼酎を飲んでいるが、無性に生ビールが飲みたくなくて飲み友達を無理やりに誘いつき合わせた。いつものビアホールで待ち合わせ飲みでしたら止まらない。幾杯もジョッキを空け、さらに近場の飲み屋を探し続けて飲む。数えるのが嫌になるほど飲み、最後に最初のビアホールで最後の乾杯をしてお開きにした。

上機嫌で電車に乗り、乗り越しもせずに駅に降り自転車置き場に行き自転車に乗る。あれほど飲んだのに自転車に乗れるとは、大したものだとうぬぼれていた瞬間、暗闇の横断歩道に親子の人影を見て、ブレーキをかけた。酔いの為かブレーキが効きすぎて横転し頭をレンガの塀に打ち血が出る。硬膜下血腫の経験からすぐに救急車を呼ぶところを間違い警察に電話した。若い警察官は、最近飲酒運転の自転車事故が非常に多い。たまたま被害者もいないので今回は不問にしますが今後は注意してください。自転車も自宅まで私が送りますので、あなたは救急車に乗って下さい、と言う。私の持っていた診察カードを見せて、近畿中央病院に連絡してもらい、当直医に検査と二針の手術で手当てが終わり、来てくれた家内とタクシーで帰ったが寝られない。明日は仕事だから寝たのだが寝られない。

翌日は雲の上を歩いているような変な睡魔に悩まされ続けたが、痛みはだんだん消え軽症で済んだ。後日、病院で会計をした時の処置の明細には筋肉・臓器には至らないキズとあった。この診断は、生命保険の給付対象外であると知らされた。当たり前だと納得した、頭以外なら救急車は呼ばなかった程度だが、酔いつぶれて階段を転げ落ち硬膜下血腫の手術を経験したので心配した。

私は、酒飲みの量が多い、常人とは思えないほど飲む。そして食べるから知らぬ間に血糖値が上がり糖尿病の圏内になっていた。これまでは、毎日のジョギングで汗を流し消費カロリーも多かったので数値が隠れていたのだが、仕事を始めて運動をしなくなったために、血糖値が上がってしまったのだ。運動か、食事制限をするしかない。

死をめぐるあれやこれ(97) 石川 吾郎

サッカー大会の裏で進行すること

ワールドカップの日本代表の活躍で日本中が浮かれている裏で、この国では大変なことが進行している。◆軍備費の倍増・敵基地攻撃能力・原発再稼働の加速・老朽化原発の延命と新原発建設・インボイス制度の実施・隙があれば増税など◆これらは国の根幹にかかわることと、ろくろく国会で議論せず一気に大きなことを決定している。新聞やTVニュースの最近のトップ記事はサッカーで、国のあり方の変更という重大ニュースはそれ以下だ。サッカーはローマ時代のコロッセオの剣闘士の戦いを思わせる◆保守の論客・中島岳志氏が指摘するには、岸田内閣は日本国にとって非常に危険な存在であると。岸田氏は自分の理念を持たず総理になるために総理になった。来年の広島サミット開催のみを目標にしている。現在の低支持率にもかかわらず首相をおろされず地位にしがみついたために、こういった重大な決定を節操なく次々としているのだとも中島氏は指摘する。◆岸田氏はぶれることだけはぶれない。一貫性のないことだけは一貫しているとも。また自分の長男を公設秘書に任命するという事もある。◆しかも国民がサッカーの試合に熱狂している裏で、目立たないように進める。国民の注目を集める大きなイベントが起こると、その裏でこっそり大きな政治的決定をして、後戻りできないようにしてしまうのだ。これは権力がよくやる手口で、「ショックドクトリン」という。◆ショックは大

災害であっても、日本代表チームの活躍でもよい。とにかくその裏でひっそりと、国家にかかわる重大な事項を目立たぬように進めていく。国民の多くの目からは隠して、国民の大部分を不幸にして自分と身辺の利益のみを肥え太らせる、そんな国の方向転換なのだ。◆皆の衆、最大のご用心をめせ。

芥川だより一九一号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 97	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 105	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 55	祖蔵哲	2
大峰奥駈道 61	下村嘉明	4
オクラの山たより 75	因了生	5
隠された歴史 50	満田正賢	8
道を行く 三四	成瀬和之	10
プロバガンダに騙されるな		
学び直そう戦争と憲法の歴史	成瀬和之	13
	(九)	
俳句	土田裕	14
	影山武司	
編集後記	S K生	14
ふみの道草 54	山椒魚	15

素老人☆よもだ帳 (105)

坂本 一光

◆赤木さん一人の声も民意です

最近、この国の司法の無力をあらためて思う判決があった。司法の無力と言ったが、それはもちろん国民の無力ということになるであろう。

森友学園に対する国有地売却を巡る裁判で、また赤木さんの声が無視された。財務省の決裁文書の改ざんを苦に自殺した元近畿財務局職員赤木俊夫さんの妻雅子さんが、改ざんを指示したとされる佐川宜寿元国税庁長官に損害賠償を求めた訴訟で、大阪地裁が請求を棄却したのである。「夫はなぜ改ざんをしなければならなかったのか」、それを知りたい、それが知りたいだけという雅子さんの願いは再び無視された。

事の起こりは、森友学園への国有地売却で八億円余の値引きが行われ、安倍晋三元首相の妻昭恵氏と学園側との親密な関係が影響したのではないかと疑われたことであった。二〇一七年二月、安倍氏は国会で「私や妻が関わっていれば、総理も議員も辞める」と大見えを切って答弁したが、これをきっかけに理財局長だった佐川氏が改ざんの方向性を決定づけた(二〇一八年財務省調査報告書)。

さて、今回棄却判決が出た裁判の前に、

雅子さんは、二〇二〇年三月国と佐川氏を提訴した。裁判では、夫が改ざんの経過を記録した「赤木ファイル」の提出を求めたが、国はその存否さえ回答せず、裁判所の催促で二〇二二年六月によく開示した。ところがその半年後の十二月に、一億円を超える賠償請求を全面的に受け入れるという「認諾」手続きをして裁判を一方的に打ち切ってしまった。佐川氏の証人喚問もかなわず、佐川氏は二〇一八年三月の国会証人喚問でも証言拒否を連発、その後も公の場所に姿を見せない。公文書改ざんは民主主義の根幹を揺るがす大問題であるが、財務省という身内の調査では佐川氏の動機も改ざん指示の内容も闇の中であつた。

こうした流れの中で、雅子さんは二〇二二年九月、佐川氏を虚偽有印文書作成などの疑いで告発したのであった。今回の判決は、佐川氏が改ざんの方向性を決定づけたと認定しながら、国家賠償法に基づき、公務員個人は賠償責任を負わないとし、佐川氏が遺族に謝罪し説明する法的義務もないと述べている。

赤木ファイルには、理財局から近畿財務局へ改ざん指示のメールが続々と来る中で赤木さんが抵抗し、また抗議するメールを出していたことなどが残っていたという。ただ佐川氏の改ざん指示内容の具体的なものや、政権とのやり取りがあったのかどうかなどははっきりしないようである。岸田首相は一貫して「しつかり受け止めさ

せていただきたい」と語り、「森友問題と真摯に向き合っていく」と言うが、彼が首相を務める国は、全てを闇に葬ることになる認諾手続きを唐突に取った国である。赤木さんとともに改ざんに関わった上司たちはみな異例の出世をしたことも話題になった。

そんなどうしようもない国の政権が、北のミサイル連発やロシアのウクライナ侵略を天の助けとばかり、防衛費倍増の大合唱の指揮棒を振っている。

(かたちは心であり、心はかたちになる
大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談 (55)

祖蔵 哲

『アメリカを哲学する』

今、世間はサッカー熱にうなされていく。中東が初めて舞台となったサッカーワールドカップがペルシヤ湾岸のカタールで11月20日開幕した。日本は同国の1993年「ドーハの悲劇」のリベンジとかで今回は「ドーハの奇跡」を連続して起こし、順調に勝ち進んでいたが、

やはり世界の壁は厚かった。奇跡は三度起らず結果的に過去の実績と同じく決勝トーナメントに進めなく敗退した。これで世間の異常な熱気は少し冷まされるだろう。オリンピックと同様、国家の勝敗を争うスポーツになぜ国民は熱狂するのだろうか。

しかし、きらびやかな会場での盛り上がりの方、大会の費用や出稼ぎ労働者などをめぐって批判も出ている。また、今回の大会は「最も高額なW杯」と騒がれている。そして、すでにウクライナ侵攻したロシアは参加を拒否されているが、新たにロシアに武器を提供しているとされたイランも参加に対して論議があった。このように人権、金権、政治問題は近年のスポーツに密接に関係している。それにも関わらず、相変わらず日本はこれらのことに無関与を装い、国際的に意識の低下をさらけ出している。今の時代、スポーツだけが聖域ではありえない。

さて、サッカーといえば、人気ナンバーワンの国際スポーツである。サッカーがなぜ世界に広まったのかという理由は諸説あるが、やはり発祥がヨーロッパであり、植民地支配によるところが大きいだろう。その植民地支配が及んでいなかったアメリカは現にサッカーは三大スポーツに入っていない。ただし、今回のワールドカップは日本と同様決勝トーナメントまで進んだせいか人気は急上昇し、8位の野球を追い越す勢いである。日本

同様、野球は旧世代のスポーツとなりつつあるようだ。そんな変化もあるアメリカであるが、未だに世界では特異な位置にある国である。政治、経済とも世界を牽引し影響力を持っている。今月はその大国アメリカを動かす思想を哲学してみよう。

1 アメリカの思想基盤

アメリカを貫く思想は「プラグマティズム」である。プラグマティズムは一般に実用主義と言われるように生じた結果により思考の意味を決定しようという思想。つまり何事も役に立つことが第一という考えで、対局は「理想主義」だ。理想主義はヨーロッパ大陸の考え方で、**④**「連合はこの理念によって統合されている。プラグマティズムはアメリカ建国の歴史に関係する。自由を求め何もない土地に入植してきた開拓民にとつて、抽象的な概念や体系はなんの意味も持たなかった。重要なのは生きるために結果を残すことだけ。理論はあっても行動と切り離されたものは必要なかったのだ。」

哲学者 C.S. Lewis は最初にプラグマティズムを標榜した。アメリカ建国後 100 年の頃である。従来の「真理」という概念は対象とそれを認識する内容が一致した時のことを指していたが、プラグマティズムではその対象が予想される効果と合致した時のことをいう。その意味からこの思想は「道具主義」とも呼ばれ

る。従来の思想である理想主義の立場では、真実は一つだけであるが、プラグマティズムでは真実は複数あるという。この考え方はアメリカの事情も反映している。様々な国からの移民から構成される複合国家アメリカの価値は様々であり、真実も多様である。さらにその思想は自然科学と宗教にも及んでいる。役に立つ限りで科学は真理であり、そして神も真理である。アメリカを動かすのはプラグマティズムに基づく「科学」と「宗教」である。そのような「真実」を作り出す手法は現在のトランプ前大統領も大いに利用している。

2 三つの自由主義、「保守」「リベラル」「リバタリアニズム」

アメリカの底流に流れるのは「役に立つこと」というプラグマティズムであるが、普段からそれを意識している人は少ない。アメリカを動かす具体的な思想と言えば「リベラル」「デモクラシー」であろう。それらはやはり、彼らにとつては単なる「理念」でない。それは日常に役に立ってこそその思想であるから常にそれを表に掲げ叫び続ける必要があるし、実践する必要がある。他国の「自由」「民主主義」に対しても介入するのはアメリカのこのような事情からである。

まず、その「自由」から考えてみよう。これは自由主義である。アメリカにとつて自由という価値がいかに重要かはイギ

リスの圧政から逃れてきた建国の歴史から明らかである。

さて、アメリカの自由主義は通常リベラリズムと訳されるが厳密にいうとこれらは同じ概念ではない。自由主義とは、権力の干渉から自由を守ろうという思想である。奴隷状態からその繋がれた鎖を切るという状態、すなわちフリーになることを意味する。これをパーリンは「消極的自由」と定義している。建国当初のアメリカはこの自由主義そのものの国であり、個人と個人の欲望が葛藤を起し社会は混沌として、自己の自由を守るにはピストルで自衛するしかなかった。現在でもアメリカは銃社会であり根底的には変化していない。この徹底した個人自由主義は「保守」と呼ばれている。

さて、個人が自由を獲得だけでは弱肉強食の世界になり、逆に大多数の個人の自由は再び失われる。そこで社会に個人の自由実現の責任を求める思想「リベラリズム」が生まれる。これは「積極的自由」と定義できる。リベラリズムは個人の自由確保のために、社会、国家に一定の制約を課すことを求める。しかし、この制約の大小によっても思想は分かれる。いわゆる「大きな政府」「小さな政府」である。先の個人主義を標榜する人々は徹底した自由を求める層は国家の規制を拒否する。本来の自由主義は個人の競争であると云う「リバタリアニズム」である。これは経済分野では「新自由主義経済」

を標ぼうし、関税規制の全廃などによってグローバル経済を推進しようという現在のアメリカの態度でもある。

このようにアメリカは、個人の自由の程度と社会規制の程度のバランスにより「保守」「リベラル」「リバタリアニズム」という三つの主義がある。この三区区分は社会的伝統を守ることに關しても程度の差がある。「保守」は伝統、權威を守ろうとするが、リバタリアニズムは社会的自由も強調し、權威への不服従や婚姻制度の廃止、薬物・売春・同性愛の是認などを唱えるため、伝統的保守思想と対立する。

3 アメリカン・デモクラシー

アメリカといえばデモクラシーと言われる。去年12月アメリカは民主主義サミットを主催した。目的は「国内の民主主義を刷新し、海外の独裁国家に立ち向かうため」とされた。そのアメリカの民主主義は「リベラル・デモクラシー」、つまり「自由・民主主義」と呼ばれている。

この語は、アメリカ特有の「自由」を中心とする民主主義の概念である。社会主義と議会制との融和を図ろうとしたヨーロッパの「社会民主主義」や、かつてのソ連・東欧型共産主義国家の主張した「人民民主主義」とは一線を画す民主主義という意味を秘めているからである。さらに現代の「中国的民主主義」とも。要するに、リベラル・デモクラシーは

リベラル(自由主義的)な原理と結びついた独特な形態の民主主義であり、自由主義と民主主義という二つの考え方が合体したものである。さらに言うなら、この二つの考え方の混ぜ合わせ方の絶妙さにこそ、リベラル・デモクラシーの強みがある。しかし、なぜ「個人の自由」重視する「自由主義」と全体を重視する「民主主義」が結びつくのか素朴な疑問が残る。

その答えのヒントがプラグマティズムに隠されている。「民主主義」の原理から見てみよう。古代から近代民主主義へと受け継がれた民主主義の理念とは、政治という「公」のことがらに積極的に参加することが誇るべき行為とみなされ、その政治参加は平等でなければならぬと考えられた。その場合、民主主義にとって、「公」は画定した範囲、すなわち「国境」をもつ何らかの政治共同体があらかじめ存在していることが必要になってくる。何らかの政治共同体なくしては、そもそもデモクラシーは成り立ち得ないものである。しかし、このことが、民主主義を自由主義と異質なものにする。というのも、自由主義は、本質的には、常に普遍的であることを志向するからである。自由というのはどの範囲であったとしても自由でなければならない。とりあえずは国家との共存を選択せざるを得なかった初期のアメリカ自由主義者にとって、自由主義と共存可能な政府とは、市民によって

コントロールされる政府でなければならなかったのである。それが代表民主主義と結びつき自由と微妙な関係を維持できたのである。一方、ヨーロッパの近代民主主義はいずれも貴族制などの身分制度による階級を代表する民主主義であり自由はあらかじめ制限されていた上での民主主義である。つまり、「自由」は個人主義的自由を、「民主主義」は「規制」を指すというバランスの上にアメリカのデモクラシーは形成されてきたのである。ここでも「民主主義」という「道具」が自由の実現に役立つというプラグマティズムの考えが表れている。

さて、先月から始まったアメリカ中間選挙で勝敗が決まっていなかった上院選の最後の「議席をめぐる決選投票が実施され、民主党候補の当選が確実となった。2023年から始まる新しい連邦議会は、上院ではバイデン大統領の民主党、下院では共和党が過半数を確保する構図が固まった。アメリカの議会制度は日本と同じく二院制をひいているが、その性格は少し違う。各州を代表するのが上院であり、下院はその政治を監視しチェックするの役割であるが、上院は、州の大小に係なく各州から2名直接選挙で選出される。これはアメリカの州が一つの国家であることを意味している。国連においても国の大小を問わず投票権は平等であるのと同じように、このようにアメリカ

は個人だけでなく、州としての自由も考慮しバランスをとっているプラグマティックな国家である。

大峯奥駈道(61)

下村 嘉明

体験型人間学 11

珍しい同級生が間違ひ電話と言ひ訳しながら電話してきた。何年前にも電話してきて、彼の家業である土木建設業界の苦勞話をいろいろ聞いたが、今回もさらに厳しくなつた彼の生活を語りだした。田舎では、工事が無く仕事がない。跡継ぎの息子も仕事探しで頭がおかしくなりそうなので、思い切つて息子に跡継ぎはさせず、他の仕事をするようにした。もう誰にも跡継ぎをさせない。彼独りでやっているという。私が、下請けを使つてやつたらええや、お前とは実績も財務内容も良いようだから工事は取れるやろ、と言つと、それがあかんのや、若いやる気のある奴がおらん、年寄りもおらん。彼の言葉を聞きながら、地方の田舎の崩壊はすでに終わりに近づいているんだなあ、と直感した。もう、地方に公共投資をしよう

しても、それを受注し施工する作業員や会社は弱ってしまっているんだ。何をやるにも、まずは人だ。人がいなければ、何も出来ない。

彼の話は、身内の金銭トラブルにも及んだ。いとこや叔父が大金を返してくれない。彼は外国籍だから事業も身内関係を大事にし金銭の融通もしてきたが、それがあざとなつて彼を苦しめている。それだけ業界が厳しいということだろう。

高度成長期の頃は、重機の運転席で寝ながら工期を短縮して金を稼いだという。とにかく働き通して稼いだ。その金も底をつき、仕事なく遊ばせていた従業員も、仕方なく解雇せざるを得ず5人に辞めてもらったという。

仕事はあるが職人がいない、と後輩も言っていた。ずいぶん昔の話だが、その影響が今、更に深刻になっている。3Kで若い人に嫌われなり手がない話は半世紀も昔の話だが、少しも改善されず今に至っている。私が、今通っている土木現場も職人の数が少ない。大型工事なのだが、型枠の大工は一人で、たまに応援が一人来る。彼は5時には仕事を始め昼から3時ごろには帰るマイペースな職人であるが仕事は確かでコンクリート打設後、型枠を解体すれば見事なコンクリートの壁が出来ている。

「えらい、仕事師やなあ」と言えば、仕方がないからやっているんや、と返す。彼も年だしいつまでもは出来ない。田舎

の状況が街でも起きていて、そのうちに現場作業員は、監督を除けば皆外国からの出稼ぎ労働者になっているかもしれない。

オクラの山たより (75)

困了生

一 与謝蕪村についてあれやこれやと書いてきました、そろそろ腰を上げて視点を変えねばなりません。蕪村の生きた時代、そして彼の死後の時代に彼がどういう歴史の場に立っているかを見てみようと思うのです。

蕪村が亡くなったのは一七八三(天明三)年のこと。このとき田沼意次が政治の中心を担った時代、いわゆる田沼時代が始まってからすでに十五年が経っていました。田沼意次は一般に賄賂汚職の政治家として悪評が高いのですが、近年になつて歴史家の間では積極的な経済政策を推進した有能かつ開明的な政治家として高く評価されています。蕪村が京の街で俳諧師として絵師として二つの道に活躍していた彼の円熟期ともいえる時代はこの田沼時代と重なります。残念ながら

蕪村が自分自身の生きていた時代に対してどのような思いでいたかを示す作品や文献はほとんどありません。

だからといって同時代の出来事にまつたく関心をもたず気楽に暮らしていける天下泰平の時代でもありませんでした。少年時代には西日本全体で起きた享保の飢饉がありました。壮年期には奥羽地方を中心に大飢饉が起き、蕪村の死の七月には浅間山が大噴火し、この噴火による火山灰も影響して天明の大飢饉が起きました。東北各藩の米の収穫高は例年の一割程度であり、蕪村の死後のことですが、幕府に提出された報告書によると、弘前藩の餓死者数だけでも十万人近くにのぼっています。

また、蕪村の生きた時代は「徳川社会のゆらぎ」が生じてきた時期です。財政難から幕府も各藩も年貢増徴策を取るこ

とが多くなり、各地で百姓の抵抗が顕著になりました。私たちがよく知る最初の百姓一揆は一六八六(貞享三)年に信濃国松本藩領一揆、つまり加助一揆であると百姓一揆の研究者の保坂智さんはいっています。以後、蕪村の時代には日本のあちこちで百姓一揆が発生しました。有名な宝暦年間に美濃国郡上八幡で起きた郡上一揆、そして安永の始めに起きた飛騨高山の一揆である大原騒動です。

なかでも郡上一揆は藩主金森頼錦のみならず、若

年寄、大目付、勘定奉行という幕閣中枢が罷免されたという大事件でした。もちろん一揆の中心となった農民には厳しい処罰が下されましたが、百姓一揆が原因で幕府の首脳部まで処分を受けたのは江戸時代を通じてこの事件のみです。一揆の原因は一七五四(宝暦四)年、藩主金森頼錦が藩の財政難を解消するために年貢の取り方をそれまでの定免取り(じょうめんどり 過去数年間のデータに基づいて算出され固定された年貢高)から検見取り(けみどり 毎年の収穫高に応じて決定された年貢高)に変えようとしたことにありました。幕閣とも通じながら郡上藩は厳しい弾圧をして検見法を強行しようとしたことが、農民たちも激しい抵抗をして四年間にわたって一揆を持続し戦い続けました。詳しく述べる余裕はありませんが彼らの粘り強さ、情報網のすばらしさ、戦いのねらいをどこに見据えるかといった戦略の組み立ての緻密さには舌を巻きます。

余談ですが、この郡上一揆に関する取り調べを將軍徳川家重の意をくんで幕府の評定所吟味役として活躍したのが田沼意次です。この郡上一揆は田沼意次台頭の大きなきっかけとなりました。近世史研究者の大石学は「田沼時代はまさに郡上の農民たちによって幕が開かれた」といっています。この評価はけつして過大なものではないでしょう。

しかし、こうした世の中の動きは京の

街中で生活していた文人たちにとって
は、もちろん蕪村も含めて大きな関心事
になってはいません。米相場で商人たち
がバタバタしている大坂とは異なり東北
地方の飢饉や各地で起きていた百姓一揆
はまだまだ地方の出来事であり、京に住
む文人たちには縁遠いものであったのか
もしれません。ただし自分の目の前に見
えていた農村の様子や姿勢での貧しいお
のれの暮しに対してそれを直視する視線
を蕪村はもっていました。すでに紹介し
た次の句などはそうしたものでしょう。

・ 離別(さ)られたる身を

踏み込んで田植えかな

・ 鯰(なます) 得て

もどる田植えの男かな

・ 早乙女(さおとめ) や黄楊(つげ) の

小櫛(おぐし) は刺さで来(こ)し

・ 愚に耐へよと窓を暗うす雪の竹

・ 氷る燈(ひ) の油うかがふ鼠かな

・ 我をいとふ隣家寒夜に鍋を鳴らす

・ 齒豁(あらわ) に

筆の水を嚙む夜かな

二

もう少し時代が下つていよいよ徳川の
社会の矛盾があらわになってくるとその
ような社会の動きに敏感に反応する俳人
が出て来ます。十九世紀はじめの文化・
文政の時代に活動した小林一茶です。し
かし、小林一茶の一般的なイメージは次

の句などから得られたものが多いでし
ょう。

① 雀の子そこのけそこのけ

お馬が通る

② やせ蛙負けるな一茶これに有り

③ やれ打つな蠅が手をすり足を

④ あの月をとつてくれろと

泣く子かな

⑤ 雪とけて村一ぱいの子ども哉

⑥ 我と来て遊べや親のない雀

これらの句に見られるのはあふれんばか
りの愛情をもって小さな動物や子ども、

つまり弱者へと注がれている暖かい眼差
しです。信州という地方にありながら第

一級の俳人となり慈愛に満ちた目を持っ
て、そしてほんの少しユーモア感覚を持

ちつつ身の回りにある自然と人々の生活

を見つめた人一茶。私たちが一茶を抱い

ている人間像はおおよそこんなところだ

でしょうか。

こうした認識からするといささか意外

な事実があります。

一八二九(文政十二)年、一茶の三回

忌に門弟と親族が追善のために一茶の句

碑を北国街道の南にある古間宿から柏原

宿に入る入り口に建てました。これが一

茶の句碑第一号です。現在ではさまざま

な経緯から、この句碑は長野県上水内郡

信濃町柏原の諏訪神社の入り口に建っ

ています。そこは一茶が住んでいた家のは

す向かいにあたります。

当然のことながら門弟たちは初めて一
茶の句碑を建てるにあたって選句に頭を
ひねりました。なにしろ六十五年の生涯
に残した句は我々が目にするだけでも二
万一千句をこえます。その中から門弟た
ちが選んだ句は一八二九(文政一二)年

に門人によつて編集された「一茶発句集」

には「天下泰平」という添え書きのある

次の句でした。

⑦ 松蔭に寝て食ふ六十余州哉

一八二二(文化九)年の作

「松蔭」は松が覆つてくれている世のこ

とで、松は松平、すなわち徳川の世とい

ことです。六十余州とは日本全国のこと。

句意は徳川の世のおかげで日本全国の

人々は食つちや寝るといふ泰平の世を謳

歌しているということ。すでに述べたよ

うに文化年間各地で百姓一揆があつて

とても泰平の世とはいえず、このことを

考えると⑦の句は皮肉っぽい句にも思え

ます。どちらのとらえ方をとるかはやさ

おいても⑦の句は政治色の濃い句といえ

ますが、この句こそ一茶の代表作という

思いで門弟たちはこの句を選んだに違

ありません。しかし、今の我々の一茶の

イメージからはどうもピンと来ない句で

す。

⑦の句の初出は柏原宿の近くの長沼宿

(現長野市内)で名主・問屋を務め一茶

の門人でもあった松井善右衛門の還暦を

祝う句集「杖の竹」(刊行は一八一六(文

化一三)年)です。⑦の句はその句集の

末尾にあり、その添え書きは「国家安全」

でした。また別の版本では「治世を賀す」

「泰平楽」ともされています。

この句を門人たちが選んだ理由として

刊行されたばかりの「一茶発句集」の「序

文」に「芭蕉翁に古池ありて後、古

池の句なし。一茶に松蔭の句ありて後ま

つかげの句なし」の言葉があつたといわ

れています。そろそろ天保の飢饉が近づ

いて来て社会不安がつのる時期に「天下

泰平」を願っていた一茶一世一代の句と

してふさわしいと判断したのでしょう。

「俗談平話」を使いながら、物静かで

しつとりとした情感や軽やかな滑稽味を

ベースにして自然と人間の関わりを深く

とらえていった蕉風俳諧とは一茶のそれ

はまったく異なる俳風であるとは一茶の

門人たちはよく理解していたといえま

す。

このことは一茶自身も自覚していま

た。自分の俳諧は蕉風とは一線を画すも

のであり、「荒凡夫(粗野な人間)」の

ままに「夷(ひ)の俳諧(田舎風の俳諧)」

を徹するのだ、とは一茶の信念でありま

した。このことは門弟に宛てた一八一九

(文政二)年二月の書簡の言葉からもう

かがわかります。門弟から恋の句の評を頼

まれた一茶はまず次のように述べます。

まったく恋の調べなくとも、俳（お

もかげ）にて恋をもたせるべし。かかる句作、芭蕉一派のならひなり。

といつており、そんな控え目な句作の在り方こそ蕉風の句作りだと言ったそのすぐ後で次の言葉を書いています。

法に縛られずして法にかなえ

つまり、蕉風の作法にこだわることなく句作すればよい、といつています。蕉風を常に意識しながらもそこから大きく飛躍した俳諧の世界を一茶は目指していたのでしよう。その思いを率直に述べた次の句もあります。

⑧ 芭蕉翁のすねをかじつて夕涼み

一八二三（文化十）年の作

「蕉風俳諧を一応尊敬はしてるんだけど、それだけではどうもね」とユーモアを交えて語っているような句です。

話がズレ始めているので、大急ぎで元にもどすと、筆者の言いたいのは小さいものや弱いものに慈愛に満ちた視線を送るお爺さんという私たちが一般にもっているイメージとは違った俳人像を江戸末期の人たちはもっていたということに尽きます。

三

我々の持つ歴史上の人物像と実像の違いはしばしば起こるのですが、小林一茶の場合はかなり大きいようです。たとえば彼を主人公にした小説「一茶」を書いた藤沢周平は随筆「一茶という人」でこう書いています。

（かつて）私の頭の中には、善良な眼をもち、小動物にもやさしい心配りを忘れない、多少こつけない句を作る俳諧師の姿があつた。

ところが藤沢が若いころに東京の北多摩の結核療養所で俳句の会に出るようになり、一茶について書かれた文章を読んでいたと、そこにはそれまでもついていた一茶像を木っ端微塵に砕くようなことが書かれていたのです。

一茶は義弟との遺産相続にしのぎを削り、あくどいと思われるような手段まで使つて、ついに財産をきつちり半分とりあげた人物だつた。また五十過ぎてもらつた若妻と、荒淫ともいえる夜々をすごす老人であり、句の中に悪態と自嘲を交互に吐き出さずにはいられない、すね者の俳人だつた。

藤沢ならずとも「呆れ返つた」としかいえないような一茶の実像です。しかし、

藤沢はこの一茶像の落差に興味を持つて彼の俳句や伝記をあれこれと読み進むにつれて彼の一茶の評価は変化していきま

す。そして、ゆつくりと価値の再転換がやつてきたのが近年のことである。一茶はあるときは欲望をむき出しにして恥じない俗物であつた。貧しく哀れな暮しもしたが、その貧しさを句の中で誇張してみせ、また自分の醜さをかばう自己弁護も忘れない、したたかな人間でもあつた。だがその彼は、またまぎれもない詩人であつたのである。

こうした認識に立つた藤沢がとりあげた一茶独自の作品は次の句です。

⑨ 木枯しや地びたに暮るる辻諷ひ

一八〇四（文化十）年の作

この句に「世路山川より嶮し」という前書きが付けられています。「世路山川より嶮し」とは世間の人の心の冷たさをいっています。「辻諷ひ（つじうたい）」の「諷ひ」とは「謡曲」の「うたい」のことで、それは一般の町人が学ぶ芸ではなく武家でも身分のある者が学ぶ芸でした。つまり、「辻諷ひ（つじうたい）」はどこかの藩

の祿を離れて江戸に流れてきた浪人者、それも元をただせば身分ある武士がする

大道芸でした。⑨の句意は「寒風吹きさぶ江戸の町角で終日地べたに座り込んで昔学んだ『謡曲』を歌い続けて錢を乞う元武士の零落した姿よ」ということになりま

す。藤沢はこの句のロー・アングル、すなわち「町行く人を足元から見上げるかのような作品であることに注目します。それが一茶独自の俳諧の視線だ

⑩ 霞む日や夕山かげの飴の笛

一八〇五（文化十）の作

「飴の笛」とは飴売りが吹く唐人笛（チャルメラ）のことで、この句を読むと春霞がただよう夕暮れ時の懐かしい風景が郷愁を呼ぶ音の記憶とともに私たちの心の中に広がって行く思いがします。とらえがたい春霞の情景を聴覚的にとらえた腕前はみごとというほかはありません。

俗物の極みのような一茶がこのような句を作りえたのはなぜか。藤沢は一茶の「強烈な自我の主張」ではなかつたか、と考えています。そうした強い自我をもつた一茶像を中心にすえて藤沢の歴史小説「一茶」は書かれています。

こうした藤沢の一茶像はなるほどと思

四

いますが、やはり、不満が残ります。それは徳川の世に起きていた社会の動きに敏感に反応していた一茶の姿をすくいきってはいないということ。冒頭に述べたように蕪村にはゆらぎ始めた社会に開わった記述や作品はほとんどありません。ですから蕪村が書き残したもののから十八世紀の日本を見ていくことはまず難しいことです。しかし、一茶は違います。

「時代を詠んだ俳諧師」といわれるように世俗に生き、世俗を見つめ、世俗の言葉を使いながら自己の思いや時代の動きを率直に詠んできた俳諧師です。自己の人生観や時代観を世俗の言葉で飾り気なく表出した彼の句の多くは蕉風的な美意識から見れば「駄句」「句屑」であると見なされ「一茶句集」にはほとんど採録されていません。たとえば次のような句は私たちが入手しやすい岩波文庫の「一茶句集」には見ることはできません。

- ⑪ そよそよと世直し風や飛ぶ螢
- ⑫ 世直しの大十五夜の月見かな
- ⑬ 世が直るなほるとでかい螢かな

「世直し」とは不都合な現状を变革して新たなより良き世界を迎えたいとする近世後半に起こった民衆の思いを表現した言葉で⑫の句は一茶の住む柏原宿から遠くない信州松本藩で凶作のために起こった百姓一揆、いわゆる赤藁一揆の翌年に作られた句です。今年は大きな満月が拝

めるほどに連日秋晴れが続いている。今年は豊作だ。凶作に苦しむ百姓たちの騒動も起きた悪い世が直ることだろう。世直しの年がやってきたのだ、という気持ちでストレートに表現された句です。また、一八〇四（文化元）年の九月にロシア使節レザノフ一行がやって来ると一茶は同年の年末に次の句を作っています。

- ⑭ 春風の国にあやかれおろしあ舟
- ⑮ 門の松おろしあ夷（えびす）の
魂消（たまげ）べし
御代にあふ
- ⑯ 梅が香やおろしあを這（は）す

この句を作ったとき一茶は江戸にいました。幕府の目付遠山金四郎景晋（とおやまきんしろうかげみち）北町奉行であった遠山の金さん、つまり遠山金四郎景元の父親（おや）がロシアとの対応をするため長崎にむけて出発するという話で江戸の町は湧いていたことでしょう。

⑭の句は「ロシア船は春風のようにさわやかな日本の習慣に感化されてはいかが」という句意。⑮の句の「門の松」の「松」は徳川のこと。⑯の句全体は徳川家が海外との門を守る日本をロシアの野蛮人はさぞ肝をつぶしたことだろうという句意です。⑯の句意は梅の香りのような日本がロシアを屈服させているように、なんといい時代に生まれたものだと

心から思う、です。三句とも日本優越意識が濃厚ですが、当時の日本人の多くが持っていた感情でしょう。こうした一茶の句の率直な表現によって文化・文政のころの時代の様相が少しばかり透かし見えてきます。

極めつきの俗物で荒唐、おまけにすね者、しかも同時に第一級の詩人であった一茶。筆者には手に余る多面的な人物ですが、しばらくは一茶の人生や彼の俳諧を通じて見える彼が生きた時代を見ていこうと思います。

隠された歴史（50）

満田 正賢

前回に続き、古代逸年号（九州年号）

に注目して、江戸時代に塙保己一が編纂した群書類従に収録されている各種縁起と系図の出版を分類し、その縁起、系図の性格を考察します。なお、群書類従には膨大な文献が収録されていますので調査から漏れた文献・記述がある可能性があります。結果ではないことを再度強調しておきます。調査結果の分類については、「常色」

白雉―白鳳―朱雀―朱鳥―大化」と続く二中歴（九州年号）系統をA属、「大化―白雉―（空白）―朱雀―白鳳―朱鳥―大化」と続く皇代記（資料X）系統をB属と表記し、A、Bどちらにも当てはまらないものをC属と表記しました。「統〇巻」は統群書類従の巻を表します。

今回は群書類従に収録された文献の考察を行ないましたが、今回は統群書類従に収録された文献の考察と全体のまとめをおこないません。統群書類従に集録された文献のうち古代逸年号（九州年号）が記載されたものとその分類は次の通りです。

⑬造伊勢二所太神宮寶基本記 続卷三A属

「天武天皇朱雀二年乙酉」とあります。「乙酉」は六八五年（天武十四年）にあたりB属ではありません。二中歴では六八五年は朱雀二年にあたり一年の差はありますが、A属の記載であると考えられます。

⑭二所大神宮麗氣記 続卷五十九 不明
「以去白鳳年」とありますが、前後に年次を示す記述がなく、A、Bどちらとも言えません。

⑮大和葛城寶山記 続卷六十五 A属
「金剛山縁起云、私記、白鳳四十年辛卯」とあります。「辛卯」は六九一年（持統三年）です。計算すると白鳳元年は六五二年となりA属の白雉元年（B属

では白雉三年)にあたります。「白雉」を「白鳳」とした書き替えがあつたものと考えられます。A属の白雉元年の干支が手元であり、それ以降の年号の情報が無かつたためにこのような記述になつたのではないのでしょうか。

⑩ 近江国別浦八幡縁起 続巻七十四 B属

「人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥」とあります。「乙亥」は六七五年(天武四年)にあたり、B属です。

⑪ 伊予三島縁起 続巻七十六 A属

・「端政二曆庚戌、自天雨降給」とあります。「端正二年庚戌」は二中歴端政二年(五九〇年)の干支と一致します。

・「金光三曆壬辰」とあります。「壬辰」は五七二年で、二中歴金光三年(五七二年)と一致します。

・「卅三代崇峻天王位。此代從百済国仏舎利渡。此代端政元曆・・・」とあります。二中歴の端政元曆(五八九年)は崇峻期にあたり「崇峻天王位」の表現と合致します。

・「轉願元年辛丑」とあります。「辛丑」は五八一年です。年号の漢字名は逆転していますが二中歴の願轉元年は六〇一年であり、五八一年は鏡当元年にあたります。

・「卅七代孝徳天王位、番匠初。常色二戊申」とあります。「戊申」は六四八年(孝徳大化四年)で、二中歴の常色二年(六四八年)と一致します。

・「卅九代天智天王位、自是藤原氏初同大政大臣冠。同白鳳元年辛酉」とあります。辛酉は六六一年(斉明七年)で、二中歴の白鳳元年(六六一年)と一致します。

・「四十二代文武天皇位大宝元年辛丑」とあります。「辛丑」は七〇一年(大宝元年)です。

・「自端政二年永和四年以七百十九年也。自大宝元年至永和四年六百七十八年」とあります。永和四年(北朝年号)は一三七八年であり、大宝元年(七〇一年)から六七八年後で正しい表現です。

その計算でいくと端政二年は六六〇年となります。二中歴の端政二年は五九〇年であり七十合いません。他の「端正」記事の年次が二中歴と合致していることから、「七百十九年也」という文面自体が誤っている(実際には七百八十九年と記載されていた)可能性があらあります。

・「系図三嶋大明神」の記述の中に「天武天王御宇天長九年壬子」とあります。壬子は七一二年(元明和銅五年)です。この記述については別の考察が必要です。

*「伊予三島縁起」は、後述する善光寺縁起と共に、純粹なA属で記された縁起と言えます。但し「轉願元年辛丑」のように不正確な記述も見られます。

⑬ 「日本皇帝系図」 続巻百七 B属

・「孝徳 諱 輕 天萬豊日 治十 大化五 白雉三」とあります。

・「持統 高天原廣野姫 諱 菟野女帝 治十 朱鳥十」とあります。

・「天武 諱 大海人 天淳中原瀛真人 治十五 朱雀元 元季壬申 白鳳十三 元年壬申」とあります。

・「文武 諱 輕 天之真宗豊祖父 治十一 大化四 大宝三 慶雲四」とあります。

*「日本皇帝系図」も代表的なB属ですが、文武期に大化が四年続いたと明記しているところに特色が見られます。

⑭ 「善光寺縁起」 続巻八百十四 A属

・「貴樂元年壬申、三十代欽明天皇治天下十三年」とあります。壬申は五五二年で二中歴の貴樂元年(五五一年)とは1年の差があります。

・「仍年號之師安元年」とあります。

・「故有改元號知僧元年」とあります。

・「依之又有改元名金光元年・・・金光元年庚寅」とあります。庚寅は五七〇年で二中歴の金光元年(五七〇年)と一致します。

・「推古天皇御宇告貴七年庚申」とあります。庚申は六〇〇年であり、告貴元年は五九四年となります。二中歴の告貴元年(五九四年)と一致します。

*「善光寺縁起」は、ほぼ二中歴の年次と同じ九州年号を用いた、典型的なA属と言えます。

⑯ 「興福寺略年代記」 続巻八百五十七 B属

・「孝徳天皇「年号初大化元年鎌足斬入鹿。白雉元年長門穴戸ヨリ献白雉。元年大化元年始置左大臣」及び「六年為白雉元年・・・白雉三年・・・白雉四年」とあります。

・「天武天皇「元年朱雀元年。二年白鳳元年」及び「十五年朱鳥元年」とあります。

・「文武天皇「改元辛丑大宝元年」とあります。

*典型的なB属です。ここからは、各種縁起、系図に記された九州年号に関する考察と全体のまとめです。まず、古代逸年号(九州年号)の記載方法による分類をおこないました。各種縁起・系図は九州年号の記載方法によって次の五つのパターンに分類できます。

① A属に分類されるもの

「雲州樋河上天淵記」「如是院年代記」「造伊勢二所太神宮寶基本記」「大和葛城寶山記」「伊予三島縁起」「善光寺縁起」の六つです。

② B属に分類されるもの

「二十二社註式」「竹生嶋縁起」「皇代

記」「皇年代略記」「近江国別浦八幡縁起」「日本皇帝系図」「興福寺略年代記」の七つです。

③B属と考えられるが、年号の書き替えによって混乱が生じているもの

「太神宮諸雑事記第一」「本朝後胤招運録」「家伝上(鎌足伝)」の三つです。

④A属とB属の両方が入り交じり混乱を生じているもの「日吉社神道秘密記」

「*如是院年代記」の二つです。

⑤独自の年号を用いているもの「上宮聖徳法王帝説」です。

群書類従に載った各種縁起、系図の中にある古代逸年号(九州年号)を包括的に考察することによって、二中歴(九州年号)系統と皇代記(資料X)系統の二つの異なった「干支・年号対比表」が存在し、現在残されている各種の縁起に出現する古代逸年号(九州年号)がこの二系列のどちらかの対比表を用いて記されているという推定が証明出来ると考えます。さらに縁起、系図に現れる古代逸年号(九州年号)の解明にあたって、二系統の基準と比較してそれに合致しない記述の理由を探るとい手法が有効性をもつと考えます。例えば、日吉社神道秘密記の年号の記述に対しては「A属とB属の両方が入り交じり混乱を生じているもの」という解釈が可能になります。又、如是院年代記の天武期の年号の記述に対しては「天武期の年号の記述にB属の上

書きによると見られる混乱がある」という解釈が可能になります。

B属では太神宮諸雑事記第一と本朝後胤招運録で「朱鳥」と書くべきところを「朱雀」とした年号の書き替えが見られ、

「朱雀」とした年号の書き替えが見られ、家伝上(鎌足伝)では「白雉」と書くべきところを「白鳳」とした年号の書き

替えが見られます。(*A属においても大和葛城寶山記で「白雉」と「白鳳」の

書き替えが見られます。)これらは続日本紀に出てくるが日本書紀には出てこない「朱雀」「白鳳」年号が日本書紀の出

てくる「朱鳥」「白雉」年号の書き替え、意図的な修正であるとする坂本太郎氏の

解釈の根拠となっています。山本太郎氏は、岩波版日本古典文学大系日本書紀の共編者であり、日本歴史学

界の第一人者です。山本氏は『白鳳朱雀考』などの著作において、「白鳳は白雉

の美称であり、朱雀は朱鳥の美称である」という論を展開しています。通説学者

の中でこの山本氏の解釈に反対する学者は皆無です。今回の調査においても山

本氏の論と根拠となる現象は確かに見つ

かっています。しかし、この年号の書き替え、意図的な修正は一部の縁起・系図だけに見られる現象です。「朱鳥」と書くべきところを

「朱雀」とした太神宮諸雑事記第一には、日本書紀にはない「天武天皇白鳳二年」

という記述が見られます。白雉は孝徳年間

の年号ですので、この「天武白鳳」は

白雉の書き替えではありません。同じく「朱鳥」と書くべきところを「朱雀」とした本朝皇胤招運録においては、「孝徳白雉」と「天武白鳳」が並立して記載されています。

諸縁起・系図の全体像を眺めれば「朱雀」「白鳳」年号の存在を消し去ることが出来ないことは明白です。

「道をゆく」三四

成瀬和之

「女芭蕉の心意気

桑原久子の旅日記から」(二)

一八四一年(天保二二年)潤正月一六日、「荒ノ神詣の門出す。しのびの旅なれば・・・」と桑原久子さんは書き出します。久子さんは初めから日光に行きたかったのです。しかも「しのびの旅」と考えていたのです。関所を避けての「お忍びの旅」の自覚を持っています。

「吹きわたる 岡のみなとを船出して いつか二荒のやまの神風」

久子

日光へと早くも心は踊る、やる気満々

の元気の良い歌です。

風がこころよく吹いて、一六日の夜八時ごろには赤間関(下関)に着きます。

宅子さんは「うかれめあまたこの船に乗る」と書いています。遊女がたくさん船に乗り込んでくるのです。ここは大きな港町で、遊女も多いのです。ここへ泊った女性旅行者たちはみな遊女のたまたまいに一驚しています。

「うかれめが 浮きていくよをわたるらん よるべさだめぬ波のまくらに」

久子

赤間関には、結局一六日から二四日まで風待ちしました。船旅はこれが難儀です。

一七日、下関大坪の金毘羅(こんびら)社へ詣で、ピクニックをしています。眼前に六連(むつれ)島が春霞のうちに見えます。大小六つの島が連なるのでこの名がある、といいます。

「海士の子が 手引きの糸の もつれ島 波の白玉貫きもとめぬか」

と小田宅子さんは詠みます。それに久子さんは応じます。

「くろかみの 何にみだれてもつれ島 うちとけがたき海士のすがたぞ」

久子

久子

久子

久子

久子

久子

久子

久子

久子

久子

久子

この二首は『源氏物語』「夕顔」の巻を踏まえているのでしよう。名も知らずめぐりあつた源氏と夕顔の君。名乗りせよ、と迫る源氏に夕顔は「白波の寄するなぎさに世を過ぐす 海士の子なれば宿も定めず」と答え、わが身分と名前を教えないのです。

「うちとけがたき」というところが、特に、「よごすなあ」と宅子さんが褒めれば、「なんのなんの、ああたの、「波の白玉」も美しゅうござすばい」と久子さん眼前にはまた、蓋井島も見えます。響灘に浮かぶ本州最西端の島です。

「かずくべき 玉もやありて海士の
子が ふたたびみたびふたおいのし
ま」 久子

同じ一七日、久子さんらは、大坪の金毘羅社から阿弥陀寺へ行きました。現在の赤間神宮です。八歳（満六歳半）で入水した安徳天皇を弔うため建てられたお寺が阿弥陀寺でした。明治維新の廃仏毀釈で阿弥陀寺は廃され、神宮に改められました。方丈だった建物跡に老舗旅館の春帆楼が建てられています。春帆楼と神宮の間には安徳天皇陵があります。赤間神宮の門は海に眠った天皇のために童宮城のような感じに作られ「水天門」と名付けられています。赤間神宮、御陵、春帆楼は、もともと一つの敷地でした。神

宮内には平家の武者たちのお墓が並んでいます。その横には、琵琶法師の耳無し芳一を供養する芳一堂も建てられています。

赤間神宮から東へ行き、関門海峡にかかる関門橋の下をくぐったところに「壇ノ浦古戦場跡碑」・「安徳天皇入水処」碑などがあり、公園になっています。

その公園には、源義経と平知盛の両雄対決の像が建てられています。八艘飛びの義経像と錨を体に巻きつけ入水しようとする知盛像が対峙しています。

壇ノ浦の合戦で平家は滅亡します。もはやこれまで。状況を悟った二位殿（清盛の妻、安徳天皇の祖母）は、天皇の象徴「三種の神器」を身に着け、安徳天皇を抱きかかえ、船端に進みます。六歳の天皇は、「自分をどこに連れていくのか」と二位殿に尋ねます。残念ながら御運が尽きた、ここは悲しいところだから極楽浄土へお連れしますと言って、天皇を促します。言われるままに「ちいさくうつくしき御手をあわせ」る天皇。二位殿はすぐさま「波の下にも都がございますよ」と慰めながら、深い深い海の底へ。

こうして安徳天皇は海に沈んで、幼い命が消えました。
巻二「先帝投身」は、幼い天皇が平家とともに運命の終わりを迎える、『平家物語』の中でもひとときわ哀れを誘う段でしょう。
「三種の神器」も海に沈みますが、水深

が四〇メートルから五〇メートルに達し、海流が速く、海士も潜ることができません。また海の底がサンドウェーブ（海の底の砂が柔らかい波状の地形）のため剣も埋まってしまいます。勾玉と鏡は回収されましたが、ついに神剣は発見されずじまいになりました。「承久の乱」を起こした後鳥羽上皇は、壇ノ浦の合戦のあつた一一八五年当時六歳で、「三種の神器」

なしで天皇に即位したのです。この神剣が心残りで、生涯刀造りに情熱を燃やし、自ら刀鍛冶までしたほどでした。武士の台頭する時代にあつて、後鳥羽上皇は最高権力者の地位を取り戻したかったので、一二二一年、後鳥羽上皇は、「北条義時を討て」という命令を出し、鎌倉幕府を倒そうと挙兵しますが、惨敗し、隠岐に流されます。既に名譽や官職を与えれば武士を従わせることができるという時代ではなく、西日本の六カ国の土地を与えるという武士のリーダー北条義時に多数の御家人たちは従ったのです。一二二一年まで鎌倉幕府の支配権は関東など東国にしか及んでいませんでしたが、「承久の乱」で幕府の支配権は西日本にまで及ぶようになりました。

余談になりますが、鎌倉幕府の成立はいつか？ 学校では一一九二年（源頼朝が征夷大將軍になった日、「いい国つくろ鎌倉幕府」と習ってきましたが、実は歴史学界では定説がないのです。守護・地頭の設置が後白河院に認められた一一

八五年説が有力ですが、西日本を含め全国支配が確立した一二二一年説まであるのです。だからこそ歴史を学ぶということとは興味深く、奥深いと言えます。

一月二五日の朝、「かち（徒歩）よりいでたつ」赤間関には結局一六日から二四日まで風待ちでしたのです。二五日、なお風の調子がわるいので船旅をあきらめ、陸路、長府めざして歩くことになります。

【コラム】下関と金子みすゞ

二〇一一年三月一日、東日本大震災が起きます。テレビとラジオでは、商業広告の代わりに、ACジャパンのCMとして、金子みすゞの詩が放送されました。

「こだまでしょうか」

「遊ぼう」っていうと

「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと

「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと

「もう遊ばない」っていう。

そうしてあとで

さみしくなって、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも

相手に語りかけた言葉は同じ言葉で帰
ってくる。それはこだまだけではありま
せん。言葉には魂があり、心から心へ響
き合い、心と心をひとつに結びつける、
大きな力を詩が持っている。この詩に心
揺さぶられた人も多かったでしょう。

「私と小鳥と鈴と」

私が両手を広げても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を遠くは走れない。

私からだをゆすつても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私。
みんなちがって、みんないい。

それぞれが違っていることが、すばら
しい、違いをよしと肯定する。この詩の
心の広さ、何という包容力でしょうか？
今や世界中で注目を浴びているダイバー

シテイ(多様性)とインクルージョン(包
括)を先取りする詩です。

下関は、このような素晴らしい詩を書
いた金子みすゞゆかりの地です。旧秋田
商会ビルを出発点として「みすゞ詩(うた
の小径)」が整備されています。

江戸時代、下関は北前船の交易で栄え
た本州有数の港町で、明治大正の鉄道と
船舶の時代も、交通の要衝でした。港に
面した下関駅は、東京に次ぐ全国第二位
の乗客数を誇る大都会だったのです。朝
鮮半島のプサン(釜山)へ向けて、関釜
連絡船が就航し、日本から朝鮮へ、その
先は鉄道によって、ソウル、「満州」(中
国東北部)、さらにはヨーロッパへつな
がっていました。

経済においても下関は必要な位置を占
め、日本銀行は、大阪について西日本で
二番目の支店を下関に開きます。当時の
下関の歓楽街は「不夜城」と呼ばれたの
です。

一九二三年(大正一二年)春、二〇歳
の金子みすゞは、ふるさとの仙崎を離れ、
そんな大都会、下関へ出ていきます。そ
して下関の大書店、上山文栄堂の店員に
なるのです。出版業も営む大書店に働く
みすゞが、詩を書き始め、やがて自分の
詩集を出したいと夢を描くのは自然な流
れだったでしょう。

しかし、彼女の二六年の短い生涯にお
いて、詩集は一冊も出版されませんでし

た。なぜなのでしょうか？

北原白秋は一九二六年(大正一五年)
八月号『赤い鳥』に、有名な詩「この道」
を発表しています。

「この道」 北原白秋

この道はいつか来た道、

ああ、そうだよ、

あかしやの花が咲いている。

あの丘はいつか見た丘、

ああ、そうだよ、

ほら、白い時計台だよ。

この道はいつか来た道、

ああ、そうだよ、

母さんと馬車で行ったよ。

あの雲もいつか見た雲

ああ、そうだよ、

山査子(さんざし)の枝も垂れてる。

白秋の「この道」は、かつて少年の日
に見た遠い遠景と、優しい母の面影を追
想した詩です。

金子みすゞは、この詩よりも早く一九
二五年(大正一四年)頃に「このみち」
を書いていました。

「このみち」

金子みすゞ

このみちのさきには、

おおきな森があらうよ。

ひとりぼっちの榎(えのきよ、

このみちをゆこうよ。

※「榎」…ニレ科の落葉高木。

このみちのさきには、

大きな海があらうよ。

蓮池のかえろよ、

このみちをゆこうよ

※「かえろ」…蛙(かえる)

このみちのさきには、

大きな都があらうよ。

さびしそうな案山子(かかしよ、

このみちを行こうよ。

このみちのさきには、

なにかなにかあらうよ。

みんなだみんなで行こうよ、

このみちをゆこうよ。

白秋の「この道」の過去へのまなざし
に対して、みすゞの「このみち」は未来
への希望を描きます。

私たちが生きていく人生という道の先
に、何があるのか、誰にもわかりません。

けれど、この道の先には、仲間がいる、
広い世界がある、明るい未来があると信
じて、みんな歩いてゆこう……。

この詩は読み手への励ましであると同

時に、一九二五年（大正一四年）当時のみせず自身への励ましではなかったでしょうか？

一九二五年（大正一四年）、この年は、時代の転換点でした。治安維持法が制定されたのです。

彼女の二六年の短い生涯において、詩集は一冊も出版されませんでした。なぜなのでしょうかと問いました。

一九三〇年（昭和五年）三月、みずぶは自ら命を絶ちます。みずぶは亡くなる前日、下関の写真館で写真を撮っていました。下関の金子みずぶ研究者の木原豊美氏は、みずぶは自分の死後に『詩集』が刊行された時に載せる顔写真を撮ったのではないかと考えられています。

みずぶの自殺について、弟・雅輔（みずぶは回想録「年記」に、「芥川龍之介の自殺が決定的な要因となった」と書いています。もちろん、それに加えて複数の要因が重なっています。結婚生活の破綻、最愛の一人娘を奪われる嘆きと抗議、夫から感染した性病の重症化、離婚後の生活と経済の不安がありました。

何よりも詩作を巡る状況の悪化があります。大正から昭和に入るころ児童詩は衰退します。

児童詩の誕生を後押しした大正デモクラシーのリベラルで文化的な機運が消滅しました。

一九二五年に治安維持法が制定されると民主的な論調は困難となり、自由な表

現、子どものための自由な教育も否定されていきます。

治安維持法制定の翌年、一九二六年（大正一五年）『童話』廃刊、一九二九年（昭和五年、世界恐慌の年）に『赤い鳥』休刊、『金の星』廃刊。三大誌が次々に廃刊休刊するのです。軍国主義へ向かう時代、残った雑誌『愛読』にも詩が載らなくなった絶望感もありました。何もかもが八方塞がりとなり、「自分の詩集を出したい」という夢も潰え、生きる意欲も潰えたのでしょうか。

一九七〇年（昭和四五年、大阪万博の年）、初の金子みずぶ詩集『繭と墓』がガリ版刷りで作られました。みずぶの死後四〇年の時が流れていました。その四〇年の間には、一九三一年の「満州事変」（一五年戦争の開始）から敗戦、高度経済成長、そして大阪万博開催までの出来事があったのです。

プロパガンダに騙されるな

―学び直そう戦争と憲法の歴史（九）

成瀬 和之

江華島事件から一九年目、日本は、一八九四年から翌年にかけて、日清戦争を

戦います。八月一日、天皇は宣戦の詔勅を発表し、日本は「清国の野望から朝鮮の独立を守るために」戦争すると内外に宣言しました。はたして日本は、「朝鮮の独立」のために日清戦争を戦ったのでしょうか？

日清戦争で、日本軍が最初に武力を行使したのは、一八九四年七月二三日だったのです。

七月二三日の早朝、日本軍は景福宮（朝鮮王宮）を占領、朝鮮国王を事実上とりこにしまいました。そして清軍を攻撃するために南下したのです。日本海軍の連合艦隊も七月一九日、事実上の開戦命令を受け、長崎県の佐世保を出港、七月二五日には仁川の沖合、豊島の近くで清国艦隊と砲火を交えたのです。日清戦争はこうして始まりました。

NHKドラマ『坂の上の雲』でもこの豊島沖の海戦から描かれています。読者のみなさんも、かつて歴史教科書でそう学んだではありませんか？ところがこの二日前に日本軍は朝鮮王宮を占領しているのです。これについて日本陸軍の参謀本部が刊行した『明治廿七八年日清戦史』には、「たまたま日本軍が王宮の東側を通行中、王宮守備の朝鮮兵から撃たれたので、応戦して王宮に入り国王を保護したのだ」と書かれています。しかし、この記述はウソのつくり話であることが、

同じく参謀本部の手になる『日清戦史』の草案（福島県立図書館の佐藤文庫所蔵）

から明らかになりました。日本公使館と日本軍は、事前に周到な準備をして、計画的に王宮を占領したのです。詳しく知りたい方は『日本人の明治観をたぐす』（中塚明著、高文研）をご覧ください。

日本軍は王宮の西側の門、迎秋門を破壊して侵入するのですが、武田中佐の部隊には爆薬などの扱いに慣れている「工兵一小隊」が同行して、王宮を囲んでいる塀や門を破壊しているのです。二〇一八年八月一三日、私は景福宮の迎秋門の現場前に実際に行きましたが、「たまたま撃たれたから」反撃して入れるような門ではありません。堅牢、頑丈な門でした。日本軍ははじめから武力で王宮を占領するつもりだったことが、この一事からも明らかです。

日清戦争で、日本軍が最初に武力を行使したのが、この朝鮮王宮占領だったことは、日清戦争を戦った日本政府の本当の目的が「朝鮮の独立を守るため」ではなく、「朝鮮の支配」にあったことを、よく物語っています。

安倍元首相は、二〇一八年、「明治一五〇年」祝賀の一大キャンペーンを展開しました。ところが、日清戦争から五〇年で大敗戦、大破綻したのです。一九三二年の「満州国」建国から一九四二年のミッドウェー海戦の敗戦、米軍による本土空襲の開始までは、たった一〇年でした。「敵地攻撃能力」が叫ばれ、「外交なき大軍拡」が進展している現在、「大本営発

表「戦争プロパガンダに騙されず、歴史の教訓に学ぶことが、今こそ求められているのではないでしょうか？」

◇十五ページからのつづきです。

ロシアには、この戦争で俳句が詠めなくなったという俳人もいた。彼の句。

川 幼き日

流れに反し

雲泳ぐ

「人生は川のようなもので、その流れに反することはできず、乗るしかない。しかし川面に映った雲は流れに反することもできる。それをうらやむしかない。川は、美しい大きな海に向かって流れて行ってほしいと思うが、今この流れが正しい方向に向かっていくかはわからない。子どもたちには、平和と平穩の中で生きてほしい」

最後に、ウクライナの女性の句。

公園に兵士

幾度も触れる

空の袖

兵士は戦争で片腕を失ったのだ。

ウクライナの人たちは、またロシアの人たちは、この戦争で何を失ったのか。そして世界はこのうえ何を失おうとして

いるのか。人間の思いはどこでも同じだと思いつつ、私も詠う。

愚かなる考える葦山眠る

俳句

土田 裕

煤逃げの行きどころなきコロナの世
倒木を猶も締めぬる蔦紅葉
春逝きし友の訃を知る年の暮
隙間風どこ吹く風と老夫婦
木枯らしや朽ちし小舟の浮き沈み

影山 武司

朝の鐘広ぐる富士へ雁渡る
ランナーの靴をしとどに露時雨
白露を朝日にこぼすなぞへ畑
独り言色なき風に応えらる
二羽の来て落穂を拾ふ鴉かな
日めくり指の滑りて今朝の冬
ゆつくりと茶筌のの字小六月
山の音里の音まで小春かな
遠嶺より白くなりゆく初時雨
稜線のくびれに落つる時雨雲

編集後記

SK生

▼かなり以前のこと。経営の神様といわれた松下幸之助氏が「PHP」誌に「民主主義国家においては、国民はその程度に応じた政府しかもちえない」という言葉を毎号掲載し国民に対して政治にもつと関心を持つと呼びかけた。今、この言葉は心に突き刺さってくる。▼本誌で石川吾郎氏が指摘しているように軍備費の倍増など国の根幹に関わることが国会を無視して決定され続けている。まさしく行政の異常な突出である。民主主義の国でありながら行政の独裁とでも取れる情けない政府を持つようになったのはなぜか。松下氏によれば「国民がその程度」の情けない国民だからということとなる。

▼横浜で中等教育に携わっている工藤勇一さんという。「日本は民主主義国家だが、その国民は選挙の投票率の低さからみても自分たちで社会を作るんだという当事者意識は低い。それは民主主義の概念が定着してないからだ。民主主義といえど多数決。多数決こそ万能という考えが青少年の時代からしっかりと植え付けられているのだ」。では、どうするか。工藤さんはさらにいう。「民主主義を学ぶ意義は『誰一人置き去りにしない、持続可能な社会を作る』ためであり、自分が自由であると同時に人の自由も尊重する社会を作ることだ」ということを子ども

もの時から教えることだと。当然、皆が自由であれば意見の対立は生まれるだろうが「誰一人置き去りにしない。みんなが幸せになる」という最終ゴールに向けて多少の痛みがあっても全員が参加して努力し続ける子ども達となるよう育てていく。それが私の考える民主主義教育です、と工藤さんは語っている。▼「社会はみんなで作るもの」。「人のせいにならず、自分で考え、行動する」。「対立は必ず起こるからそれをどう解決するかを考えていく」。こうしたことを学んだ子ども達が大人となって私たちの国に満ちあふれたとき、松下氏が夢見たような民主主義国家に日本は近づいているかもしれない。



戦禍の中のHAIKU

二〇二二年二月二十四日、ロシアがウクライナに侵攻した。戦争の渦中にある二つの国には、俳句を詠む人たちがたくさんいるという。たとえばロシアではソビエト時代に『奥の細道』が翻訳出版され、ソビエト崩壊後に本格的な俳句ブームが起きた。二つの国の老人から若者までの俳人たちは、戦争を目の前にしてどんな俳句を詠んだか。去る十一月十九日にNHKで放送されたE TV特集『戦禍の中のHAIKU』を観た。

うつくしき

空より飛来

ロケット我らに

ウクライナ・ハルキウ市の若い女性の句である。

「俳句をつくるのは目撃した『瞬間』を記録するためです。感情があふれ出る時、人はどうにかしてそれを表現しようとするものです。俳句に感情を注ぎ込むことで、自分のためにも他の人たちのためにもそれを残しておくことができるのです」

彼女は十四歳のとき学校の授業で俳句に出会ったという。英語・ロシア語・

ウクライナ語で俳句を作り、国際大会で受賞した若き俳人である。子どもはこの国の子どもも変わらないと、こんな句も詠んだ。

子ら遊ぶ

紙飛行機で

防空壕

掌に

ミサイルかけら

痛い

「今はこの美しい空が、人を殺すた

めのミサイルを運んでいます。空は死と手を取り合っているのです」

砲撃後

看板なしで

通り分らず

そして、「街は自分の顔を失ったのです」

ウクライナ・キーウ在住の女性の句。

色失せた

凍える女

地平線が震える

「私は轟音の中を歩きながらこの女性を見かけました。ブチャで住民の殺

害や女性への暴行のニュースが報じられていました。彼女自身に何かあったのか、誰か親しい人を失ったのか分かりませんが、私はこれが戦争の顔なのだと思いました」

ウクライナ・リビウの男性は、夏に

冬のことを考えている自分がいたと詠んだ。

七月の暮れ

去年の切り株で

薪を割る

彼はまた、フェイスブックに「焼け焦

げたアカシアが八月に花を咲かせた」

と書いて死んだ兵士のことに触れ、「これは俳句そのものだと思った」と語った。

一方、ロシアの俳人たちも詠う。シ

ベリア在住、俳句歴三十年の女性がウクライナ侵攻の翌日に詠んだ句。

特別軍事作戦

サラダに油

少なめに

とって良くない出来事です。歴史的に

見てロシアの進歩に何の役にも立ちません。…これからは節約もしなければならなくなるかと一瞬思いましたが、火に油を注ぐというロシア語には「煽る」という意味もあることに思いが至りました」

次は、ロシアの男性が、「この数十年、

私たちは何かまちがったことをしてきただのではないか。ロシアの水はすべて黒いのです」と詠んだ句。

二月 川面に穴

ルーシの水

すべて黒し

チエーホフが生まれた村の近くの女

性は、ロシアの侵攻後、西側諸国では

ロシア文化の拒否が起きていることに触れ、「私たちはどうすればいいのか。

チャイコフスキーやチエーホフが否定

できますか。私は悲しいです」と詠んだ。

文化キャンセル

昇る日なき地

夜に沈む

◇以下の文章は十四ページにあります。

季節の画像



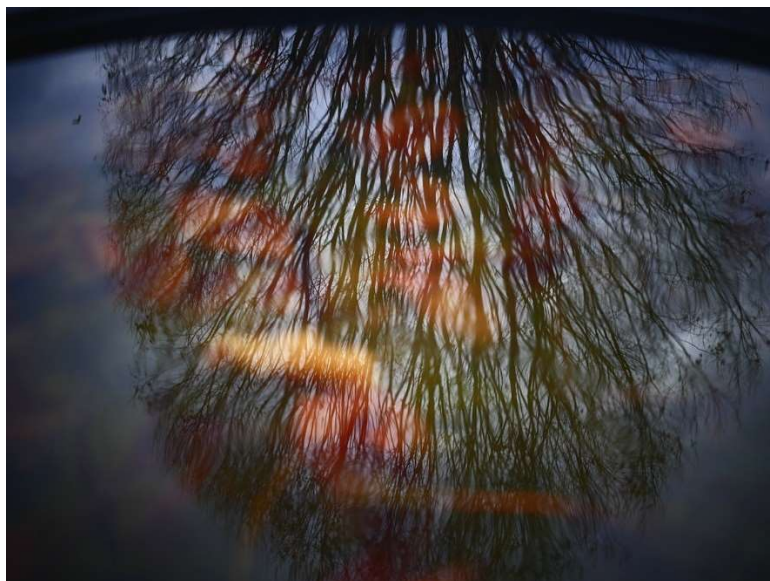
京都御苑



イタヤカエデ



秋を泳ぐ



秋のリフレクション